

現代社会と課外教育プログラムの身体性

山 口 政 信

Modern Society and Phenomenal Body in Student Development Program

YAMAGUCHI Masanobu

This paper describes the current status of students who are unable to get the sense of connection with other people due to decreasing awareness of their bodies. To improve this circumstance, the staff of Student Affairs Office at Meiji University reconsidered the significance of regular curriculum and came to conclusion to develop “Student Development Program”.

The important point in Student Development Program is providing students with collaboration models. By experiencing models, students’ physical awareness will be restored and accordingly they create their own vital and humane styles.

In a Student Development Program called “topos”, students experience rich language derived from collaboration and go through metamorphosis as they accumulate various physical and linguistic experiences. That is to say, students acquire identity as a member of society as well as lively bodies that can sympathize with other people through interactions in this experience-based program.

《個人研究第2種》

現代社会と課外教育プログラムの身体性

山口 政 信

目 次

I はじめに	IV 正課外教育の再構築
II 社会現象としての大学	V 課外教育プログラム
III 身体意識の蘇生	VI まとめ

I はじめに

変容するのが本性である社会。その社会を構成する私たちも、^{かたち}形を変えながら生成している。このような環境下にあつて、如何にして来歴を意味あるものにしていくのか。正課外教育が見直され、「課外教育プログラム」がクローズアップされる理由がここにある。

変容は急激であればあるほどひずみも大きく、少子化が^{かた}型くずれ時代に拍車をかけている。この時代に育った学生を受け容れ、形を整えて社会に送り出す責務を負う大学は、その存亡をかけて改革に走ってきた。それは混沌をも意味する多様化であったが、正課外教育が見直されたことは、まさに「青天の霹靂」^{へきれき}であった。

いうまでもなく、大学教育は正課教育と正課外教育で成り立っている。「課外教育プログラム」は、正課外教育に属するが、運動部や文化部といった学生の自主に委ねられてきた課外活動（クラブ活動）とは一線を画す、「助育」という志向に基づく企画である。

課外教育プログラムを現在性のあるものに編み上げることは、正課外教育の問題点を解きほぐし、大学が置かれた今日的課題を解決することに他ならない。本稿は、これらの実体を身体性として捉え、その意味を問い直すものである。なお、本文中の《 》内は、筆者の創作ことわざである。

II 社会現象としての大学

1. 渦中の大学

（社）日本私立大学連盟学生委員会は、「いささか元気を失った現代の学生を支援するために、本報告書が活用されんことを望む」として、正課外教育への期待を次のように表明している。

学生の人間的成長を促すには、教室内の正課授業のみでは不十分である。大学全入時代では、大学間競争はより激化し危機は深刻になる。その際、正課外教育に対する取り組みは、当該大学に対する評価の大きな部分をなすであろう⁽¹⁾。

このような提言がなされる理由は、現在の若者が抱える生きづらさが、そのまま大学の悩みとして横たわっているからである。モザイクを張り合わせた集合体のように、何かの要因で総体を失い、機能不全に陥りやすい未病の身体がそこにある。心身活動の総体であるはずの私、ゲシュタルトである自分がバラバラになり、人としての本来性を失っているのである。このような状況について、香山は以下のように説明している。

これまで「ひとつのまとまりを持つもの」と言われた「自己」が統合されたものではなくなり、深みを失って表面化し、さらには常にだれかと濃密な二者関係、人々の視線の仲、ネットという漠然とはしているが必ずだれかが自分を識別してくれる世界、といった何らかの関係性の中で、その都度、分離生成を繰り返すような断片的なものになったのだ⁽²⁾。

ここに、当事者意識がもてない傍観者、すなわち現実感の喪失や外界との疎外感にひしがれた者の病理がある。この生きづらさに潜むのは、経験の乏しさ、つまり自分が自分だとは思えない、存在感がない、居場所がないといった、生活実感（アクチュアリティ）の希薄さである。その希薄さゆえに、リアリティがゆがんだ行為として発現しているのである。

2. 自分の形をつくる

(1) 型はモデル

生の体験が生み出す自分、この自分が見えない時代である。社会は表層化し、個は中身を欠いて、文化の伝承が困難な状況にある。無駄を削いだ型は、誰にでも通じるモデルである。型は身体化された文化であって、他を排除するものではなく、他から排除されるものでもないことが忘れられている。

文化には、人の生を象る^{かたど}型というものがある。生に形をあたえる型というものがかならずあるはずだった。若いときの反撥や抵抗も、たいていはこの生の社会的な型に対してなされてきた。が、そういう型がいまはとてもみえにくく、感じにくくなっているような気がする。生の基本、生のベーシックにかぎって、こんなことを言わなくても分かると思っていたことが、じっさいには他人に伝わりにくくなっているような感触がある⁽³⁾。

ここに、無稽から脱しきれない、形なしの闇が指摘される。型にはめるな、型は没個性だといった主張を聞くにつけ、それが逃避や自己弁明でないことを祈らずにはいられない。もちろん、型を身につけさせるための方略に問題がなかったわけではない。そうであるからこそ、まずは定石・定跡が何

であるかを周知し、生命体としての形を変えていかなければならない。《徹すれば型 徹底すれば形》

(2) 意味の変性

型を終着点であると考えたとき、そのまなざしにバイアスがかかる。型は形へのプロセスであって、学びの対象であるとともに、抗うための対象でもある。習熟するにしても、反発するにしても、光と影の関係にある型は、その人の境地によって姿を変え、立ち現れる姿は変化する。「意味変性」とは、このようなものの見方やまなざしの変節によって生じる現象をいい、境地の変化と同義である。

「からだで憶える」とは心の記憶であり、想起・想像することなくしては成就しない。スポーツに長けるには、社会の規範や原理を身につけ、判断や行動を確かなものにする身体知・経験知による想像力が欠かせない。競泳には、泳ぎの型を限定しない自由形（フリースタイル）という種目がある。ただ、最速の泳者を決めるという種目であることから、効率の最もよいクロールという泳型が採用されているに過ぎない。極論すれば、自由形だからと「犬かき」にこだわる者がいてもよい。それは想像力の問題であり、現代版のドンキホーテと認識されるだけのことである。

さて、型とはコスト・パフォーマンスのよいシステムであるが、一筋縄では身につかない。その型を学ぶ者も、抗う者も、格闘する対象は無稽な自分である。この理に気づけば、道はおのずから見えてくる。さらなる自己実現を望む者には、苦勞して身につけた型を崩す決断に迫られるときがくる。まさに、そのときこそが、形という自分のスタイルを形づくる、真の勇気が問われるのである。

相撲界では「なまくら四つ」は歓迎されない。「鈍」と書く「なまくら」は、「のらくら」である。右四つ、左四つとは型であるが、のらくらしながらいつしか形という「自分の相撲」に持ち込む力をつけた者のなまくら四つは、融通無碍な形へのプロセスである型として、容認することができよう。変成はパラドキシカルなのである。

(3) わざ言語・からだ言葉

個が輝くのは、^{かた}型というセオリーにその人の^ち血を入れた^{かたち}形が生まれたときである。型を習得する不自由を乗り越え、その型の文脈や様式を突破したところに形が宿る。世は、その人を名人と呼ぶ。

そのとき、おじさんは、揚げ幕に仮りに丸い穴をこしらえて、そこからむこうを見てな、って言うんです。心の中で揚げ幕に丸い穴をこさえて、そこから遠くをじっと透かして見るようにしてみな、って言われて、形と心が一ぺんにわかりました⁽⁴⁾。

六代目尾上菊五郎の指導における「わざ言語」と、十七代中村勘三郎の「形と心が一ぺんにわかりました」という応えには、心身の総体としての動感や質感が込められている。それは、菊五郎の動感が形に、質感が心として、勘三郎に転移したことを意味する。その深層説明には、三浦の「比喩が、精神と身体の実体化に役買ったのである。いや、ある段階で、比喩が実体化したのだ」⁽⁵⁾という論考がふさわしい。ここに血の通った形の存在と、勘やコツを伝授するわざ言語の妙が示唆される。

この血とは、血液や血漿といったモザイク的な科学的言語ではなく、心身活動の総和・総体であり、血筋がよい、血が騒ぐといった「からだ言葉」としての血であることはいうまでもない。

人間における、もっとも基本的なものさしというのは、ほかならぬ人間のからだなんですね。世界を計るために、われわれは長い間からだを使ってきた。そして、そのことを一番よく表しているのが「からだことば」だったと言っていいんじゃないでしょうか。

言葉というのは、意識の世界のものですから、脳の中で高度に抽象化されている。ところが、一方ではそこまで抽象化されていない、つまり言語化されていない無意識の世界があって、意識と無意識の間を結ぶ言葉が、からだことばだった⁽⁶⁾。

このように身体を介するからだ言葉は、意識と無意識を往還する表現力がある。また、次に示すように、「わざ」の伝承や創発にかかわる存在としても注目される。

「わざ」の習得は、運動経験による知覚と言語力を結びつけ、まとまりのある組織構造（ゲシュタルト）にする、弁証法的な作業に依存する⁽⁷⁾。

動感や質感が託されたからだ言葉やわざ言語による対話を想起するとき、師弟関係の密度を知ることができる。それは、技術として分節された技が、「わざ」というまとまりのある一連の動作をもって、菊五郎から勘三郎に受け継がれたことから推察されよう。

(4) 文武両道

日本には心身にかかわる文化の伝統が存在し、その根幹には文武両道という美意識があった。

「文武両道」という言葉の意味を、いまはまったく誤解しているけれど、実はこれ、「文」は意識の表現を意味し、「武」が身体表現を指していたんですね。日本人はそうやって、自分たちの文化的表現を完成させていこうとした⁽⁸⁾。

よい文章にはことわざの萌芽がみられる。「言即事」として存在することわざ創りには、文武両道の型を育み、型を突き抜けた形という自分の流儀へ昇華する触媒のはたらきがある。わざ言語にも似る創作ことわざは、心身の調和を促進する機能を有しているのである。

「型」はさまざまな動きをもっとも理想的なかたちに凝縮したものだ。身体の構えのあり方であるときもあるし、動きのプログラミングであることもある。どちらにしても「型」は卓越した先人の要約力の賜物である。この「型」を反復練習することによって、達人の持っているさまざまな動きの本質を学ぶことになる。これは自発的に技を盗むということではないが、技の本質を伝えてい

くには効率のよいやり方である。そして、技をある程度自分の身体に馴染ませていくと、その「型」にどのような動きが凝縮されているのかが、おぼろげながらわかってくる。先人が行った要約のプロセスを、自分がもう一度たどり直すということになる。この作業は、動きに対する認識力を必要とするとともに、その認識力を強く鍛えることになる⁽⁹⁾。

動きに限らず、物事を認識するには、身体感覚を研ぎ澄ますことが欠かせない。斎藤もいうように、型を身につけるとは、模倣という想像力を身体化することである。が、現在の不幸は、想像力をかき立てるべき型という本物の姿が見えず、物語を紡いで習慣行動を身につけにくいことにある。

陶芸家の橋本誠は、「語る会」(2008年9月12日)においてこのことに触れ、「本物は、自分の言葉で自分の世界を言い切っている。個性は上手い、下手ではなく、それを超えたところに出る」と語っている。ここに、型を突き破ったところの形が言わせる迫力がある。このような言葉の琴線に触れることができるか否かは、すでに身体の問題である。「文化は辺境に生じる」という言葉が象徴するように、形の文化は、型を突き抜けたところに生じる。脱中心化に成る形は、新たな型を形成し責任のすべては自分がとる、という自負として命を得る。これすなわち、陶芸家、橋本誠の形である。

Ⅲ 身体意識の蘇生

1. 暗黙知を生きる

身体の機能である知覚は、心のはたらきと知識・思考に影響を与える。この意味において、身体は知覚器官であり、記憶装置でもある。

人間が知識を発見し、また発見した知識を真実であると認めるのは、すべて経験をこのように能動的に形成、あるいは統合することによって可能になるのである。この能動的形成、あるいは統合こそが、知識の成立にとって欠くことができぬ偉大な暗黙知的な力である⁽¹⁰⁾。

ポラニーは、知るとは実践的な知識と理論的な知識の統合であり、高度な創造力や知覚作用は身体的過程を経てはじめて成し遂げられるという。明確には語れなくとも、物事の全体的な把握を意味するゲシュタルトは、経験を能動的に形成することによって生じる。知識が知恵として再編されるには、身体による濾過や咀嚼^{ろかそしよく}が欠かせない。暗黙知が身体知や経験知とも表現される所以である。

脳は孤立した存在ではなく、身体を支配し、逆に身体に支配されます。この身体は一方で脳の出先機関であるとともに、その基礎でもあり、さらに脳にとっての環境の重要な一部を構成します⁽¹¹⁾。

下條がいうように、暗黙知は外部環境との相互作用を経た、目に見えない変化への対応力である。

脳（記憶）と環境をとりもつ身体は、世界を自分のこととして納得するための情報を、収集・発信する源泉である。その情報がひらめきや気づきとして顕在化するには、他者を含む外部環境と接するといった、身体感覚の拡張が欠かせない。

このように、身体は共通コードとして現前してきた。しかし、今や身体は観念化し、補助線を引くための想像力を失ってしまったかのである。意識にのぼらないことが身体の本質であるが、自傷や暴力に象徴される過剰な意識化は、身体への渴望が反転した現象のように映る。この問題を解きほぐすには、暗黙知を深め、形式知化を高めること、つまり体験によって生じた相互の絆や共通感覚を糸口として、共通する言葉に言い換えるなどの過程を経ることが近道になろう。

2. 来歴を培う

社会変化が急激であったことはまちがいないとしても、それを上回るほどに暗黙知が矮小化し、孤立化がすすんでいる。時として必要な孤独に耐えられず、表層のつながりによって自己を欺かざるを得ない現状に欠けるものは何か。

おそらく、人間の知は、身体と声のざわめきの中から立ちあがり、身体と身体の間で紡がれてきた。いまだに言葉によって名づけられていない、身体と身体との間で発生する荒々しい生命の共振。やわらかでしなやかな〈身〉としての知は、生命の充溢の軌跡のように受胎する。こうした身体の共振活動が、言葉を媒介にして反復再生産されるようになったとき、知の制度化が始まり、知の言説が成立し、知は骨格を備えることになる⁽¹²⁾。

このような心身関係は、古くて新しいアナログの問題であるが、デジタル社会が加速するにつれて無味乾燥化し、あきらめや絶望感を抱え込む時代になっている。以心伝心という高度な心身の文化が影を潜め、身体意識が希薄になったことによって、拠り所のない自己喪失感が浮遊している。

このような現実感に乏しい状況にあって、「筋肉痛、私にも筋肉あったのだ」と記した女子学生がいた。スキー合宿に参加した男子学生には、「痛いのがまたいい」という句もある。いずれも、筋肉痛によって身体が存在に気づいた実感が伝わってくる。これらは、言葉を身体技法に付随させることにより、健全なかたちで身体を意識のもとに呼び戻すことができることを示す好例である。

そもそも、発見や洞察がなされたというのは、その解法を意識できた時点をさすわけです。その前の段階では無意識の水面下で「来歴」が持続的に作用し、意識の「周辺」を形成していたはずで、これが「地」として潜在的に形成されたからこそ、発見が「図」として浮かび上がったのです。そして浮かび上がるにあたって、身体の何気ない動きや、外界の事物への何気ない注意が大事なもので、それらが無意識の過程と重なるからなのです⁽¹³⁾。

意識の基盤が無意識にあって、この無意識こそが「脳の来歴」の貯蔵庫であり、「来歴」が影響力

を行使する場である、と下條はいう。つまり、意識化ができて想像範囲を広げるためには、暗黙知である「地」を養い、形式知という「図」に浮上させることが鍵になる。

我々が抱える問題は、この来歴の貧困さにある。その解決の成否は、個としての身体が、他者と協働する社会的身体に変成することができるか否かにかかっている。今まさに、図の前提となる地を耕すことが問われているのである。

Ⅳ 正課外教育の再構築

1. 個と集団

自分探しとは内省であり、人間形成には欠かせない志向である。が、生活実感から遊離し、蛸壺に入り込んでしまっただけは元も子もない。この理を下斗の文章からたぐってみたい。

集合的アイデンティティが得られてはじめて、そのカテゴリ内における自他の差異が個人的アイデンティティのもとになる。集合的アイデンティティのないまま、個人的アイデンティティだけが確立されるということは本来考えにくい⁽¹⁴⁾。

自己愛が過ぎると、対極にある自己抑制へと反転する。その間での生きにくさが逃避を生んでいる。そこには、彼我の洞察や個と集団の捉え方に齟齬がある。自分を磨いてくれるのはメタ認知力であり、自分の枠組みとは性格を異にする他者との出会いであることを知らねばならない。

人格の陶冶という視点から見れば、共感する人も反発を感じる人も、どちらも同じくらい必要である。人間存在の本質は、他人の心がわかるということである。そのはたらきを支えるのは、脳の前頭葉にある他人と自分を鏡のように映し合う「ミラーニューロン」と呼ばれる神経細胞である。ミラーニューロンの助けを借りて、私たちは他者を鏡として自分をみがいていく。同じような鏡にばかり映していたのでは、自分の姿を多角的に見ることができない。ときには、歪んでいたり、曇っているような「鏡」もある。そのような場合でも、私たちは掛け替えのない何かを学ぶ⁽¹⁵⁾。

茂木は、過保護社会の問題点を鋭くえぐっている。好きなことだけをすればよいとは、功罪・清濁が相半ばする考え方である。糖衣錠もあれば苦い良薬もあるということを体験しておけば、「気に入らぬ風もあろうに柳かな」と、しなやかに生きることができようというものである。

自己領域内にいること、すなわち「自分は自分、人は人」の快樂と、このような手ごたえのなさ（自己存在感の希薄・欠如＝喪失）の苦痛が引き換えになっているのだ。他者という手ごたえを得るには自己領域を出なくてはならない、つまり自己領域内にいることの快樂を手放さなくてはならない。これも違った意味で苦痛である。苦痛であるだけでなく、不安であり、おびえでもあるだ

ろう。自己領域を出ることには、かなりの決心とエネルギーを要するのだ⁽¹⁶⁾。

ぬるま湯につかっているカエルは、跳び出す機会を失って湯だってしまうという話がある。真偽のほどはともかく、比喻としては分かりやすい。つまり、「苦は楽の種 楽は苦の種」であって、安易さに安住することは、やがて苦痛となって跳ね返ってくることになる。この「ヤマアラシのジレンマ」に断を下すには、経験の集積が必要なのである。

2. 森が育てる海

かつて、「海は森を知っているか」⁽¹⁷⁾ というタイトルで、教養教育と専門教育の補完性について論じたことがある。その一部に、多摩川の河口（神奈川県）から東京都を経て、大河の一滴がしたたる笠取山（山梨県, 1941m）の頂上付近までの約150kmを、10回に分割して走ったときの経験を綴った。

最終日は荒天の山登りゆえに歩いたが、高度1800m付近には、東京都が植林をしている旨の看板があった。目的地に着くころには風雨は激しさを増し、山肌を削った水が流れ落ちていた。しかし、期待する祠からは一滴も落ちてこない。そのとき、事前に踏査した友の「この前は落ちていたのに…」という声。問えば、そのときは快晴であったという。この情景に「にじみの教育」の思いが広がり、『水が涸れれば木々が枯れ、木々が枯れれば水涸れる』という句が生まれた。

小見出しの「森が海を育てる」は、『森が育てる海』『森が死ねば海が死ぬ』『漁師が木を植える』と言い換えられる。このように架橋するには、『森^{あお}緑ければ海蒼し』といった比喻の読解、編集・創作力が欠かせない。SPS（Student Personnel Service）というアメリカの高等教育理念に添ったこのような志向は、正課教育と正課外教育を包括したアルファでありオメガである。

3. 大局観を育む

「時代はジグザグにしか進まない」といわれる。王道を歩むことは難しく、教育もまた然りであって、その評価は判定しやすい正課教育の成果ではかってきた。しかし、正課における専門教育の早期化が、学生の悩みを増幅させてきた。その主な要因は、教養教育や正課外教育が重視する経験が不足していることによる、自信の喪失にあると目されている。

経験は、日常的に構築された生活地平を強化するばかりでなく、人が生きる日常的世界という土台そのものを揺るがし、混沌とした世界を呼び起こすきっかけともなるものである。

日常を強化すると同時に、その日常性をも破壊する経験。こうした諸刃の剣の性格を有するからこそ、従来の教育哲学では、経験は、その危険な牙を抜き取られて、教育方法という扱いやすい道具箱の中に押し込められてきたのではないか⁽¹⁸⁾。

高橋がいわんとするのは、教育界は経験における緒刃の剣が扱いにくいことにより、管理がしやすい正課教育に走ったということである。その反動は企業の要望からも明らかのように、経験の賜物で

あるコミュニケーション力やバランス感覚を欠いた学生の増加であった。

もちろん大学とて手をこまねいていたわけではなく、建学の精神に基づいた科目、キャリア科目、ボランティア科目などの単位化を模索してきた。これらの科目は課外教育プログラムと複合するが、それは、正課教育の実効が再認識された結果であるとも考えられる。さらにひるがえって考えるならば、正課教育との差異化が問われることになったのである。

V 課外教育プログラム

1. 助育ということ

学園紛争の終焉とともに機能を発揮し始めた課外教育プログラムは、1980年以降に一層の発展を見た。これは課外活動に参加していない学生にも、空気や関係性を感受できる共有の場（トボス）を提供し、全人的な人間形成を支援する企画である。

（社）日本私立大学連盟学生会⁽¹⁹⁾は、1988年の日本私立大学連盟業務別研修（学生関係）テキストにおいて、「課外活動が学生の自主的、自発的な教育活動であるのに対して、課外教育プログラムは、大学が中心となり、教育的な観点に立ち、意図的な営みとして企画することを目的とする『助育プログラムである』」との文言を掲載している。この「助育」とは、「助けて育てる」のではなく「育つのを助ける」こと、今にいう支援を意味する。その概略は以下のとおりである。

学生を相互批判と相互理解を組織しうる「社会的関係」に組み入れて、その大学にふさわしい学生として成長させることにある。学生を大学における社会的関係に組み入れるに当たっては、学生をただ単に「教えられる存在」として位置づけるのではなく、積極的に大学とかかわりあう関係を確立することが肝要である⁽²⁰⁾。

課外教育プログラムの提要は、大学の内外を問わず、教職員と学生が社会的関係をもって参画することにある。次の4項目は、その精神を示すカテゴリーである。

1. 建学の精神の理解・大学への帰属意識向上のために
2. 学生個人への啓発支援、発達支援に資するために
3. 大学という空間の構築に資するために
4. 体験する機会や幅広い教養を身につける機会の提供に資するために⁽²¹⁾

この副題を「アイデンティティ確立支援」としたのは、「個のケア（支援）」の必要性が高いからである。個をケアするとは、既に考察したように、集合的アイデンティティを形成する過程における、自己発見を促進することである。それには、まず自他の息づかいをも感じながら、知を身体次元に引き戻すための方策が必要である。確かに身体は物ではあるが、そこに立ち現れる身体とは、私とい

う身体、わたしが住みついている身体であり、この現象的身体が実感できることが肝要なのである。

想像力と言えば意識の問題と考えられがちだが、そうではない。それはまず、身体の問題なのだ。身体がまず他人の身体になりきるのである。その運動、その緊張、その痛みを分け持ってしまう。想像力の基盤は身体にあると言いたいほどである⁽²²⁾。

三浦を援用して表現すれば、課外教育プログラムは、他者をとおして自分をとらえ直す（発見し、理解し直す）ことにおいて意味があるとなる。つまり、自分は生きられている身体である、ということへの気づきの促進である。感覚する身体が、能う身体として知を語り始めるのは、まさにそのときである。課外教育プログラムをアイデンティティ確立支援と呼ぶのは、他者とともにあることによって知的身体が再編されるからである。

2. M-Navi プログラム

明治大学の課外教育プログラムは、「M-Navi プログラム」という愛称で親しまれている。2007年には、文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」、いわゆる GP (Good Practice) に採択されるなど、その内容は質量ともに一級品である。その取り組み名称は、「社会人基礎力を育む『M-Navi プログラム』—『個』を強くする出会いの場—」である。この主眼は、協働（コラボレーション）を根本語にした、「体験型プログラム」である。

個人「我」があって人生を経験するのではない、人生という経験が「我」と言いうる「我」を生むのである⁽²³⁾。

彼我の洞察が想起される上田の文言は、「個」を育むのは、社会を構成する人間としての間主観性、他者との相互作用にもとづいた経験である、と言い改められよう。ところで、これまでに体験・経験という言葉が無造作に使ってきた。ここで改めて広辞苑を引いて確認しておきたい。すなわち、体験とは「自分が身をもって経験すること。また、その経験」とある。経験については、「感覚・知覚から始まって、道徳的行為や知的活動までを含む体験の自覚されたもの」という説明が、求めるところに近い。その他の経験の項からは、意識化、事実把握、技能知識を得ること、という共通性が読み取れる。堂々巡りの感
は免れないが、両者に共有されているの



協働（コラボレーション）の一コマ

は、「身をもって自覚すること」である。ここに、M-Navi プログラムを体験型プログラムに設え、協働をキーワードにした意味がある。

経験とは、自己の世界の限界を思い知らされる出来事として理解すべきではないか。それは同時に、排他的で自己防衛的な自己から脱皮する契機にもなるものである⁽²⁴⁾。

高橋は、「他者は、自己の世界の限界を否応なく教えてくれる」ともいう。旅に喩えられる経験とは、苦痛がともなう異質な人との人間関係をつくるなど、大人になるための物語を紡ぐことである。この勇気なくして自己実現は叶わない。つまり、脳が環境とかかわるとは、「身を捨ててこそ浮かぶ瀬があれ」という身体をとおした経験であり、「高い理想」と「低い手」をもち合わせることに他ならない。

私がいう「来歴」とは、単に遺伝記号のことでもなければ、狭い意味の記憶のことでもありません。知覚だけでもなければ身体だけでもなく、ましてや脳神経の活動だけでもない。あえていえば、過去から現在におよぶ脳と身体の経験と、その経験を提供した世界の総体である⁽²⁵⁾。

下條がいう脳と身体が経験した世界の総体とは、いふなれば、日常という生活世界の一切合財を包み込んだ、心身の統合した現象的身体である。それは、来歴を培う M-Navi プログラム（課外教育プログラム）の精神としての身体と合一する。「可愛い子には旅」の具現である。

VI まとめ

変容する社会と学生の変貌を軸に、大学のおかれた現状に触れた。そこには、真似るにしても、抗うにしても、その対象となる型を見失い、身体意識の希薄化にともなう共通感覚が得られない学生の姿がある。大学は、この現状を切り開くため、人間陶冶のあり方を検討し、正課外教育における課外教育プログラムを充実するに至った。

すなわち、学生が、自分を心身活動の総体として受けとめるためには、然るべき「型」というモデルを設えることが求められる。その型とは、不動の頂点ではなく、自分の血が通った「形」をつくるための通過儀礼としての存在である。

無稽から型、型から形へと自己変成を生じるには、身体をとおした経験と、比喩に富んだ言葉との出会いが欠かせない。体験で得た動感や質感を伝える「わざ言語」「からだ言葉」「創作ことわざ」が意味をもつのは、その言葉が心をすすめ、「わざ」の伝承や創発を喚起するなど、人としてのゲシュタルトを形づくるからである。これにより、課外教育プログラムの主題は、協働による体験（暗黙知）と言葉（形式知）が回帰する、現象的身体を形成する場（トポス）であることが確認された。

引用文献

- (1) (社) 日本私立大学連盟正課外教育研究分科会『大学生が人間（ひと）として成長するために—正課外教育の重要性の再認識—』(社) 日本私立大学連盟, 2007
- (2) 香山リカ「若者とパフォーマンス」『はんなりする身体』専修大学出版局, 2006, p.12
- (3) 鷺田清一『悲鳴をあげる身体』PHP 研究所, 2000, p.4
- (4) 関谷子『中村勘三郎楽屋ばなし』文芸春秋社, 1985, p.45
- (5) 三浦雅士『考える身体』N T T出版, 1999, p.11
- (6) 養老孟司『広告批判』マドラ出版, 1996.10, p.50
- (7) 山口政信『「わざ」の伝承と創発を喚起するスポーツ教育の創作ことわざ』明治大学教養論集通巻435号, 2008, p.256
- (8) 養老孟司, 前掲書, p.51
- (9) 齋藤孝『子どもに伝えたい<三つの力>』日本放送出版協会, 2002, p.50
- (10) マイケル・ボラニー『暗黙知の次元』紀伊国屋書店, 2002, p.18
- (11) 下條信輔『<意識>とは何だろうか』講談社, 1999, p.5
- (12) 栗原彬ほか『内破する知』東京大学出版会, 2000, p.9
- (13) 下條信輔, 前掲書, p.206
- (14) 下斗米淳『アイデンティティと苦闘する若者と大人』『はんなりする身体』専修大学出版局, 2006, p.92
下條信輔, 前掲書, p.206
- (15) 茂木健一郎『欲望する脳』集英社, 2007, p.3
- (16) 芹沢俊介「いるのにいない」『はんなりする身体』専修大学出版局, 2006, p.173
- (17) 山口政信「海は森を知っているか」『明治大学和泉委員会リベラル・アーツフォーラム』第2号, 明治大学和泉委員会リベラル・アーツフォーラム編集委員会, 2002, p.4
- (18) 高橋勝『経験のメタモルフォーゼ』勁草書房, 2007, p.31
- (19) (社) 日本私立大学連盟学生部会『現代学生部論』(社) 日本私立大学連盟, 1989, p.76
- (20) (社) 日本私立大学連盟学生部会, 前掲書, p.80
- (21) (社) 日本私立大学連盟正課外教育研究分科会, 前掲書, p.8
- (22) 三浦雅士, 前掲書, p.57
- (23) 上田閑照『哲学コレクションⅢ 言葉』岩波書店, 2008, p.3
- (24) 高橋勝, 前掲書, p.21
- (25) 下條信輔, 前掲書, p.94

(やまぐち・まさのぶ 法学部教授)